



書評

川成 洋



■株式会社ヤマハミュージックエンタテインメントホールディングス
■2017年11月刊
■定価 1,800円+税

裸足のピアニスト

下山静香 著

本書は、今や「スペイン音楽の伝道師」としてスペインとラテンアメリカのピアノ曲を牽引している第一人者・下山静香氏の本格的なエッセイ集である。

著者は、いよいよ20代の終着点が見えてきた頃、「スペインが私を呼んでいる、という妙な確信につき動かされて」スペイン行きを決意する。その後の行動はまさに電光石火の速さだった。まず、文化庁の芸術家在外研修員に応募する。スペインで受け入れてくれる先生を捜す。ウィーン郊外での講習にスペイン人の先生がやってくるという噂を耳にし、早速、講習への参加を申し込み、ウィーンへ飛ぶ。実際に先生の講習を受け、スペインでの研修員応募書類に推薦文とサインをもらう。この先生はマドリッド在住のロサ・マリア・クチャルスキ。「自分のスタイルを押しつけるのではなく、その人の個性を尊重したうえで、よりよい方向に導いてくれるタイプ」の先生だった。この先生なら大丈夫。しかもぜひいらしゃい、と言葉をかけてもらい、さながらブーメランのごとく日本に舞い戻り、文化庁の2回の難関試験にパスして、マドリッドに到着する。いよいよ「音楽生活リセット」、別言すれば、「マドリッドの果敢な冒険」が始まる。

著者がマドリッドで得た最初の体験は、ちょうど到着時に執り行われていたカトリックのセマナ・サンタ(聖週間)の宗教行事であった。聖週間最後の3日間で行われる教会ごとの「十字架の道行き」行列との遭遇。画家ムリーヨ——17世紀後半の対抗宗教改革運動において、宗教的かつ美的な理想を表現した代表的な画家——の《無原罪の御宿利》を嚆矢とする聖母マリア像とは異なり、おそらく著者が目にしたのは、幾分派手な衣姿の大粒の涙を流す聖母マリア像であっただろう。その路上をゆっくりと進む行列に合わせて2階の窓から投げかけられる「サエタ」と呼ばれる、一種の短い聖歌……。

このマドリッドで、先述のロサ・マリアの指導のもと《ランフェス協奏曲》で知られるホアキン・ロドリゴのピアノ曲全曲を勉強した著者は、2年後のロドリゴ生誕100年を記念する本格的な「ロドリゴ・イヤー」にスペインのみならず、近隣諸国においても演奏することになった。

それにしても、特筆すべきことは、市井のスペイン人の音楽への姿勢である。

マドリッドから車で2時間半の、ブルゴス県のコバルビアスという村での出来事。著者はこの村での講習会に参加し、その仕上げと

して受講生がその村の教会で演奏する。演奏開始の時半後には教会の聖堂は村人たちでびっしりとなっている。それも、終日続いた演奏会はすべて満員だった。帰り道、路上で雑談している村人たちから「オラ! ピアニスタ・ハボネシータ!」と声をかけられる。そこで飲んだり話し込んだり……。また別のところでは、先生の別荘、あるいは古城や屋敷のある村での講習に参加した受講生が最後に演奏会を行う。近隣の人びとが一張羅でめかし込んで音楽を聴きに来ている。なんとも微笑ましい光景であり、絶えず前進しようとする若い音楽家の背中をそっと押しているのだ。

マドリッドでの1年間の生活を終えたところで、彼女はバルセロナに移り、マーシャル音楽院のマスター・コースに通う。ここでフェデリコ・モンボウの夫人、カルメン・ブラーボの指導を受け、モンボウ作品のほぼすべてを網羅できたのだった。バルセロナの後、アラゴンの州都サラゴサに移る。サラゴサは「寝ても覚めても、スペイン音楽」総仕上げの格好の場であった。こうして、スペイン民族の歴史と密接不可分なスペイン音楽の豊饒な魅力を吸収することができたのである。

書評



■論創社
■2018年2月刊
■定価 2,500円+税

新西語事始め

—スペイン語と出会った日本人 浅香武和 著

日本人のスペイン語とのはじめての邂逅は、1549年、イエズス会の宣教師フランシスコ・ザビエルの来日とキリスト教の伝来、と誰でも暗記している。もちろん、その通りなのだが、この大航海時代の覇権をめぐるスペインとポルトルの関係について確認しておきたいことがある。ザビエルはスペインのライバルであるポルトガル国王ジョアン3世(在位1502~57年)の庇護の下で、ポルトガル船に乗り込み、喜望峯を廻りインドに赴き、そこから日本へ向かったのだった。その6年前の1543年、ポルトガル船が種子島に来航し、鉄砲を伝え、翌1544年、同じくポルトガル船が鹿児島に来航した。つまりこの頃の日本人と南蛮人(スペイン人・ポルトガル人)との交流は、もっぱらポルトガルがアジアに築いた貿易ネットワーク、ポルトガルの布教保護権下にあったイエズス会の布教活動を通じてであった。こうした状態は、ミゲル・ロペス・デ・レガスピのマニラ征服によってスペインがアジアの最前線拠点を築いた1571年まで続き、その年スペインの皇太子フェリペの名にちなんで「フィリピン」と命名する。これでスペインは太平洋航路を開拓し西回りアジアに到達することができた。それ以降、本格的な日西関係が開始されたといえよう。

それにしても、ザビエルをはじめとする宣教

師たちは、たとえヤジロウのような通訳がいたとしても、日本人への布教は大変だったはずだ。日常の言葉のみならず、宗教的なコミュニケーションによってキリスト教の教義や典礼を伝えなければならなかったが、果たしてどれほど理解されたであろうか(ちなみに、宗教の自由が認められている現在の日本において、カトリックとプロテスタントの信者数を合わせて、キリスト教徒は全人口の1%に過ぎない)。それゆえ、たとえば、キリスト教の神を「大日」(真言宗の大日如来)の略。これが潤滑いだと認識して、「デウス」に変更し、聖母マリアを「観音」などとしたために、キリスト教は「天竺宗」なる仏教の一派とみなされていたこともあったようである。

本書によると、こうした困難の中で、司牧に携わる聖職者を養成するため九州の数ヶ所に、セミナリオ(神学校・中学堂)、コレジオ(大学堂・大学林)、ノビシャド(修練所)などが設立された。しかし、1587年の秀吉の「バテレン追放令」によりこうした学校や教育施設は解散や移転を余儀なくされた。そうした中で、1591年から10年の間に天草のコレジオでは各種の書籍が出版されている。伝道用の宗教書を嚆矢として『ラテン語文典』や『ラテン語・ポルトガル語・日本語対訳辞典』などの語学書

もそこには含まれていた。また、コレジオが長崎に移転してから『日葡辞書』(1603)、マニラ版『日西辞書』(1630)、さらにローマでドミニコ会士コリヤード編『ラテン語・スペイン語・日本語辞書』(1632)などが刊行された。

徳川幕府の鎖国下1616年以降にあって、スペイン語を話す異国に辿りついた日本人漂流民が見聞した情報もあった。1841年、兵庫を出港した栄寿丸が太平洋上で激しい北西の風に煽られて、120日あまり漂流したが、幸いにもスペイン船に13人全員が救助され、60日後にメキシコに上陸することができた。2年後、あるいは4年後に、長崎に帰朝する者もいた。その中の1人、21歳の沖船頭善助、さらに少し遅れて帰国した紀州藩出身の与市に対する、数ヶ月間にわたる聞き書き調査をした紀州藩徳川家臣岩崎俊章が『東航紀聞』10巻を上梓した。この見聞録には、スペイン統治下のメキシコの事情、現地のスペイン人、メキシコ人の生活状況、日常的なスペイン語などが克明に記されている。やがて明治になり、明治24年9月の新学期に、高等商業学校のカリキュラムに外国語選択科目としてはじめてスペイン語が加えられる。これこそ、我が国における本格的なスペイン語教育・研究の黎明を告げるものであった。

川成 洋
Yo Kawanari
1942年札幌で生まれる。北海道大学文学部卒業。東京都立大学大学院修士課程修了。社会学博士(一橋大学)。法政大学名誉教授。スペイン現代史学会会長、武道家(合気道6段、杖道3段、居合道4段)。書評家。主要著書:『青春のスペイン戦争』(中公新書)、『スペイン—未完の現代史』(彩流社)、『スペイン—歴史の旅』(人間社)、『ジャック白井と国際旅団—スペイン内戦を戦った日本人』(中公文庫)他。